
マイノリティなリアリティ

Mr.あいう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイノリティなリアリティ

【Nコード】

N7126T

【作者名】

Mr. あいう

【あらすじ】

普通の人間が、普通の一生を送るように。
異常な人間には、異常な運命が待っている。
それならば俺の『痛覚視』という異常は、一体どんな運命を用意しているのか。

つまるところ、これはそんな物語なんだけど……興味ある？

空港で生まれた少年

少年は、その年代の少年がＴＶに向ける情熱と同程度に彼の顔を無表情に凝視していた。

少し首のだけだいた白いＴシャツに、ジーンズ生地の手ズボンという五歳にしてはやや無個性な服装。

だがその白に散らばる赤がその少年の非凡を浮き立たせていた。彼は困ったような表情に義務感を糊付けして顔を引き締め、強張った笑顔を向ける。

「さて、これは確認の為だからもう一度聞くよ？ 君の名前は？」

少年は眼球のみを必死に動かし記憶を探る。
やがて一度瞬き、再び彼を見つめる。

「覚えてない」

何度も聞いた返答。

彼は少し手帳にペンを走らせ、質問を投げかける。

「君のお父さんとお母さんは何処に行ったの？」
記憶を探るその間。

少年は痛みをこらえるように顔をしかめた。
だがそれも気づかないほどの一瞬、彼の顔からは再び表情が途絶える。

「お父さんもお母さんも知らない」

「最後に覚えてるのは？」

「空港のオバ……親切なお姉さんが僕に声を掛けてきた」
考えるべくも無く即答。

「それで？」

「親切なお姉さんとはばらく話して、ここに来て、今親切な警察のお兄さんと話してる」

「またも即答。」

当然だろう、それが彼の記憶の全てなのだから。

「そう、か。それじゃあ、今から説明する事を覚えておいてね。君は今記憶喪失に……ああつと」

記憶喪失という言葉で幼い彼にも理解できるように言葉を噛み砕こうとする。

眉を寄せて天井を仰ぐ彼を、少年は凝視する。警察官が笑顔で口を開く。

「君は今、今まで覚えていた事を全て忘れちゃう病気にかったんだ。だから、お医者さんに行って治してもらわなきゃならない。それと、君のお父さんとお母さんを今探している。見つかるまではここにいなきゃならない。分かった？」

少年は眉を寄せて天井を仰ぐ、考えていると相手に伝えるにはこうするものだと警察官から教わったから。

そして、少年は一択の問いに答える。

「分かった」

よかった、と彼が言ったそのとき、ノックの音が室内の空気を揺らす。

「すこし行ってくるね」

腰を浮かせて、彼が扉の方へ振り向こうとしたそのとき。

少年が初めて自発的に口を開いた。相手を安心させるための笑顔を無表情に上塗りして。

「お兄さんは優しいね。でも、僕にはそんな必要は無いから」

「どういう意味だい？」

彼は立ち上がった姿勢から、視線を少年の高さに合わせて尋ねた。「お兄さんは僕のために心を痛めてくれるけど、僕ならなんの心配も要らないから」

やけに大人びた少年のそれを、不安な子供のつよがりだと思って、警察官としての笑顔で彼は言った。

「大丈夫、どうしてそう思うんだい？」

すると、少年は急に笑顔を拭い去り自分のこめかみに人差し指をつきたてる。

「だって、お兄さんのココ。真っ赤に光ってるんだもん」

少年の最後のそれを、戯言と聞き流して部屋をでた彼にさきほどノックをした彼の部下が話しかけてきた。

「で、どうでした少年の様子は」

「うーん、最後の方は何を言ってるのか不明瞭だったが。まあ、急な記憶喪失でショックを受けているんだろ。何しろ、空港にいた以前の記憶がすっかり無いから」

それを聞いた歳若い部下は少し首を傾げると、目の前の羽虫を払うように手を振った。

「そうじゃなくて、少年の記憶喪失は本当なのかどうかって事です」

「どういうことだ。嘘をいつているようには見えなかったが」

「それが少し厄介な事になりましたね。空港でアナウンスをかけても保護者が出てこないし、聞き込みしても進展無しってんで空港の関係者が監視カメラの映像を調べたんですが、あの少年が今日のANA239に乗りこむ映像が出てきたらしいんですよ」

やや過剰に口角を吊り上げる特徴的な笑い顔でそんな事を言う不真面目な部下を一度小突いてから、ようやく記憶が追いつく。

「……おい、ANA239って言ったら」

「その通り、更に面白いのが、その少年と一緒に映っていた保護者らしき人物って言うのがね……」

張り裂けんばかりに口角を吊り上げた部下が、忍び笑いと共にその人物の名を口にした。

一話目、犯罪歴は遺伝するらしい。

「あのテロリスト、遠井斜平とおいしゃへえの息子なんだってなお前」
「えはん」

目の前の脂ぎった少年の自信満々な口から一体何がとび出すのかと身構えていたら、容赦ないカミングアウトが炸裂して俺は思わず赤い箱になりかけた。

しかしまさか入学から早一週間、高校デビューがこんな形でこんなデブに粉碎されるとは。

わざわざ地元と迫害を離れて遠くの高校に入った努力が台無しである。

周りではこのアブラギツシュ君が集めたギャラリーが騒然としている。

人を集めて俺を晒し者にする事で新しいクラスの団結力をより強固な者にしようという彼の粋な計らいが実を結びつつある雰囲気、それが俺の皮膚をチクチク蝕む。

「一体何の事がさっぱりだぜエ」

とりあえず大げさに肩をすくめてアメリカンに嫌疑を否定してみた。

が、おそらく無駄。明らかに小心者なアブラギ君は完璧な証拠も無しにこんな事を言い出さないだろう。

何しろ彼はこれからの高校生活を賭してこの告発を行っているわけだし。

ようは異端分子を祭り上げて同級生に一目置かれるか、それとも空回って一線引かれるか。

どっちにしる俺には人を貶めてまで皆の注目を集めたがる彼の必死さが理解できない。

……………否が応でも注目された少年時代を送ったからかもしれないが。

で、案の定彼は手に持っていたファイルを一度ギャラリーに掲げてから俺の目の前に無造作を装って投げ捨てた。

「これを見てもまだそう言えんのか殺人鬼」

そう言つて唇を吊り上げる彼の決め顔は、餌に食いつき釣り人に吊り上げられそうなフグを連想させた。

自信満々に提出された証拠資料を吟味、というほど中身は無かったが眺めて見ると……何と、まあ。

「これ、警察の内部資料じゃなイデスカー」

「ふん、身内にそう言う事に顔が利く人がいてね」

辺りを見回し強調するようにそんな事を口にするアブラギ、過剰に口角のつりあがる気味悪い笑い方。

しかし、彼は虎の威を借る狐という言葉を知らないらしい。

「つかこんな奴に威を貸す国家権力だから色々問題が起きるんだと再認識させられた。」

ともかく、だ。

「まあ、残念ながらというか不可抗力というか俺は斜平の息子だが……」

本人確認が取れてギャラリーが完全に一步引く。

誰かこの中に人格者はいらっしやいませんかー、と叫んでみた。心の中で。

まあいいさ。

アウエイなんて慣れている。

むしろこのアウエイな雰囲気は俺のホームみたいなものだし。

というわけで俺は絶対に譲れないキーワードの撤回を求めた。

「……しかし厳然たる事実として俺は殺人鬼じゃねえ。撤回しろアブラギツシュ君」

あ、思わず言っちゃった。

不名誉なあだ名を付けられた彼は相当に沸点が低いらしくみるみる顔が赤くなっていく。

ついでに心の傷口からゼリー状の『痛み』が溢れ出す。どうやら

彼のトラウマを引つかいたようだ。

ふむ、どうやら中学時代の思い出が、彼にこんな行動を取らせているらしい。

そうまでしてクラスでの人権を欲しがる彼がどんな3年間を送ってきたか容易に想像がついた。

しかし孤独が嫌だ、苛めも嫌だと贅沢な奴だ。二者択一が出来ないのだろうか。

「だ、黙れ！ 殺人鬼！ 親が人殺しならお前も人殺しに決まってるだろ！」

……激昂した彼の持論によれば犯罪歴は遺伝するらしい。

その持論を見事証明し殺人者遺伝子を発見したら魔女狩りのような事態が発生しそうで少し寒気がした。

いやいや、じゃなくて。

「告発ついでに濡れ衣着せたいなら証拠もってこいよアブラギ君」

「は、はあ！？ お前みたいな奴をほつといたらそのうち人を殺すに決まってるだろ馬鹿が」

イラッ。

「お前を最初の一人にしてやろうか……と、うわ」

あまりのクラスメイトの引きように俺もちよつと引いた。

身内の不祥事を使った自虐ネタを披露するには心の距離が何光年か遠かつたらしい。

というか、アブラギ君は気づいていないのだろうか。

クラスメイトが冷えた目で取り巻いているのは、俺だけじゃなく汗だくになって叫んでいる彼込みだということに。

残念ながら彼の立ち位置は彼が思い描いていたような『犯罪者予備軍を摘発した英雄』じゃなくて『犯罪者予備軍の神経を逆なでするヒステリックデブ』となる模様。

「はああ！？ 何言ってるんだよ、そんなの、そんなこと言われたってどうも思わねえよ！ つーかそっちこそ撤回しろ！ 俺のことなんつったあ！」

ただでさえ危険人物との交流で温まっていた彼の心は心無い一言で完全にオーバーヒートしたみたいで。

どろどろと、心の傷口から赤黒い粘液が流れ出す。

俺にしか見えないらしいそれはゆっくりと彼の理性を包み込み、染めていく。

「謝れって！　なあ、聞いてるのかおい！」

校舎中に響き渡りそうな彼の怒号。

それと共に彼は先ほどのファイルが置かれた俺の机を持ちあげ、げ、て？

「謝れって言うてるのが聞こえないのかああ！！」

火事場の馬鹿力を生で見える事が出来てちよつと感動した。

あ、ていうか誰か先生呼ぶか止めるかして！？

だが、クラスメイトは好奇と恐怖とが入り混じった表情で事の顛末を注視している。

もしココで誰かが止めたら、上辺は許容しても陰で『偽善者』のレッテルを貼られるんだろうなあ。

ようは異常者同士仲良くやれって事だ。

仕方ない。

殴られるよりは殴るほうが好きだ。

こいつは一方通行の暴力を受けてたらしいがあいにく俺はそこまで弱くはなかった、場数なら踏んでいる。

そう思っ、取り返しのつかない腰を上げようとしたとき。

「止めなさい！」

威圧感を含む凜とした声が澱んでいた教室の空気を切り裂いた。

新たな空気を送り込むように颯爽と教室に入ってきたのは黒髪の美少女。

意志の強そうな眼差しでジロリと現状を睨め回し、ツカツカとアブリギ君の前に立ちはだかる。

「机をおろしなさい」

有無を言わさぬ命令口調。

日頃から人を動かすことに慣れている人間の声色に、ようやく彼は正気を取り戻した。

と、同時に火事場の馬鹿力も自然消滅。けたたましい音を立てて机が床に落ちる。

自らが立てた落下音にビクつく彼と、微動だにしない彼女。

勝利者はどちらか、誰の目にも明らかだった。

「名前は」

「は、はい？」

大げさに肩をビクつかせ（ついでに頬肉もだぶつかせ）アブラギ君は後ずさった。

しかし、距離を取る事を許さず彼女は更に詰め寄る。

「だから、名前」

「あ、胡座城修です」

アブラギ惜しかった！

少し想像力のある人間ならこのあだ名への着想は簡単だし、多分中学時代もアブラギでお馴染みだったから、あんなに反応したのだろう。

彼の告発は互いのトラウマを暴露しあう非生産的な事態に発展してしまっただけ。

これで喧嘩両成敗などとはざく名奉行がでてきたら俺は番組を終わらせてでもそいつを殴ってやろう。

「ふうん、アブラギ君ね。この事は先生にも報告しておくから。ま、入学早々怪我人が出るような事態にならなくて良かったわね。それと……」

芳香を散らしながら、急に黒髪を摩か^{なび}せてこちらを振り向く彼女。遠目から見ると美人だが近くで見るとそこに迫力が加わる近寄りがないタイプの美人だった。

均整の取れた顔立ちと対象的な射抜くような眼差しが俺の内側をのぞき回す。

「私、二年の鈴代蓮」

「……ああ、俺は遠井水平、です」

初対面で互いの名前を言い合うような丁寧な人間と会ったのは初めてだったのでやや反応が遅れた。

名乗ってくれた分アブラギ君よりやや友好的に俺の名前を聞くと、彼女はニコリと微笑み、言った。

「今回はたまたま騒ぎを聞き付けてやってこれたけど、あなた、もしまた父親の事で謂れのない中傷を受けるようだったら私に相談してね」

絶対の自信と共に助力を約束してくれた。

一足遅れて教員方がやってくる。

彼女が来て、これ以上事態の発展が見込めないと見切りを付けた誰かが報告しにいったのだろう。

へたり込んでいるアブラギ君にもう敵意がない事を確認して、俺は倒れていた机を立てた。

手際よく事の顛末を先生に説明している彼女の後ろ姿を見ながら思う。

「例えるなら、捻られた雑巾から滴る汚水？」

彼女のシルエットから、ポタリ、ポタリと滴る紫の液体。

それは地面に落ちる前に霧状に広がり霧散して、彼女を淡く取り囲んでいた。

俺は経験則から彼女と言う人物を判断を試みる。

「無理して装う優等生タイプ、続けてると何処となく痛々しさがにじんでくるな」

口にした瞬間自己嫌悪で机に突っ伏した。

『痛み』というモノを見たことがあるだろうか。

二つ以上のモノが存在すれば、多かれ少なかれ生まれる負荷。不

自然。

俺にとってそれは液状ににじみ出るものだった。

棘となって突き立つものだった。

霧散して取り巻くものだった。

肉体的であれ、精神的であれ、そこに『痛み』が概念として存在してさえいれば。

俺は視覚を通じて認識することが出来る。

便宜上、俺はこれを『痛覚視』と名づけた。

文句のある奴は出てきて代案を提示しろ。

二話目、フラグと呼ばれるものの片鱗を垣間見た。

その後、友達予備軍だったクラスメイトが慰めにきたり、話しかけてきたりという事も無く孤立。

村八分という中学時代の忠実なデジャブを噛み締めつつ放課後となった。

この翌日には倍、さらに翌日には倍と、鼠算式にこの事実が高校に蔓延する現実にも早くも心が折れそうになりながらも、膝をつきそうになる足を奮い立たせて帰路についた。

バイトの時間が三十分後に迫っていなければ俺は校門の段階で倒れ伏していただろうと推察する。

『テロリストの息子』なんてステータスを残し両親が自然消滅してからしばらく、俺の面倒を見ていた親戚のうちへの投石もようやく止んだ去年暮れ頃。唯一俺に良心的だった祖母が86で死んで。

俺は自宅でさえも村八分となる事態となり、毎月振り込まれる家賃とともに地元を追い出された。

ようやく父親の呪縛から逃れられるかと思いきや、アブラギ君が全てを台無しにしゃがった。

「バイト先、もし漏れるような事があつたら……」

そのときはあまりの不幸にちよつと笑うかもしれない。

「バイト、クビをされるかもしれない」

ちなみにこれはあまりのショックに日本語がままならなくなった俺では断じて無い。

彼は同じレストランの厨房で働く仕事仲間のデルさん。国籍不明のタフガイである。

「皿を割りして、箸を折りして、店長を斬りして、ビザを切れてるして、さらに働けない」

国籍不明、就労ビザがないらしいのになぜか雇用されている彼、

その不器用さたるや物を壊して給料から天引きされすぎて時給が三分の一まで落ち込むという想像を絶するものだった。

その上今日は割れた皿を拾おうとしているときに店長に怒鳴られ、破片を持ったままで勢いよく振り向いたので店長の服を切り裂きノースリーブにする失態をやらかしていた。

これだけやらかせばもう駄目なんじゃないかとは思ったが、しかし同じ仕事仲間としてそんな心無い事はいえないので棒読みで慰める。

「うん、でも店長は優しいからまだ大丈夫だと思うよ」

「優しいさの店長、デルにいい人」

満面の笑みを浮かべるデルさん。店長もその誠実さがかって雇っているのだらう。ミスによる天引きをやや過剰にすることで労働力を安上がりに行っている店長の不誠実さと比べればなおさらだ。

そんなデルさんを見ると、中学の英語の教科書さえ持っていればアメリカで生活できる気がする。

「お前も優しいさ、いい事が教えられるデル、する」

「そうか、何だ？」

「これ、噂飛ぶこと限りなし。見るお前」

そう言っただけで差し出されたのは携帯電話。画面には黒い背景に血文字で『怪奇！口裂け少女！』と書かれており、画面を下にスクロールすると想像図として少女化された口裂け女の姿があられもない姿で描かれていた。

「……………デル。これは趣味としてはいただけない。法律に触れる」

「デルの友だち、これと会った。から、殺された」

「冗談として処理しようとした俺とは対照的に、やけに真面目なデルの顔。」

「危ない、これを注意する」

着替えを済ませてかばんを肩にかけて、デルより先に店をでてか

ら300メートル。

俺はこの、夜空を馬鹿のように見上げながら歩いていても誰ともぶつからない時間帯が好きだ。

繁華街はとうに抜けて、現在位置は住宅街。

まだ二キロほどある自宅まで歩いて帰るのは単に電車賃を忘れたからである。

デルや店長に借りても良かったのだが、まあ人から何かを借りるのは好きじゃないし、明日からの高校での態度を歩きながら考えておきたいと言うのもあった。

つまるところ、そんな些細な理由なのだ。

そんな些細な選択肢で運命は変化し、デルさんの立てたフラグはたった十数行で回収される。

「……ん？」

平和なはずの住宅街に、異常な濃度の痛みが流れ出して霧の河となっている。

赤く光を帯びたそれは俺の足元にまで流れ込む。

まだ高校生、面倒事は嫌いだし、わざわざ首を突っ込んでヒーローを気取る奴も嫌いだ。

だけど、俺にしか見えないSOSのサインを捨て置けるほど徹底した覚悟を持つてるわけじゃない。

目の前の奴を助けたいと思う気持ちは、欲は持っている。

その赤い河をたどり、曲がり角を曲がると、屈みこんで人間らしきものを殴りつけている人が街灯に照らされて暗闇にそのシルエツトを露にしている、俺は思わず身をすくませた。

タコ殴りを敢行している当事者は合羽とジーンズを着用し返り血対策万全の様相である。

こぶしを振り下ろす一動作一動作で血しぶきが舞う、痛みが濁流となりアスファルトに広がる。

サンドバッグとされている肉体からは打撃音のみが響く、悲鳴や

苦悶の声さえなく、街灯に照らされた血だまりが広がっていくのがやけにスローモーションに見えて、何もしないでいる自分の無力さを際立たせる。

歯を噛み締めて、かばんを振り上げた。

「おい、合羽野郎」

その声に反応して血にまみれた雨合羽が振り向く。さあ後戻りは出来ない。

振り向きざまに顔面へ一撃、男子高校生の腕力にそいつは尻餅をついた。

「今の内に……………」

逃げろ、と言葉をつむぐ前に、俺はそいつの顔を始めて見た。

白かったであろう子供用のドレスを自らの血に染めたそれは、耳まで口が裂けた幼女だった。

あれほど攻撃を受けたのに全く応えた様子もなく、何の気なしに立ち上がり、裂けた口角を吊り上げて俺と襲撃者に笑って見せた。赤く引き締まった歯茎から等間隔に突き出す白い歯。その隙間からのぞく下がチロチロと別の生物のように口内で蠢いた。

「私、綺麗？」

そう問いかけたそいつは、見事なほどにデルさんの携帯の液晶に映っていた画像と酷似していた。

そして、その問いを宙にぶら下げたまま、霧のように掻き消える。後に残ったのは尻餅をついたまま呆然としている襲撃者と、馬鹿のような顔で突っ立っているであろう俺。

「あれ？ 間違えまし……………ヒッ」

今度の俺の声も途中まで吐き出して喉に残った。

何しろ、血みどろの雨合羽から覗く怒髪天の怒りを称えたその顔が。

「鈴代、先輩？」

すると先輩はにこりと微笑み首肯した。

身じろぎ一つ出来ずに固まる俺の隣で立ち上がり、じいっと合羽

についた血を眺めていた。

「あ、あのもしかして間違えましたか？ 相手」

その俺の声に、ゆっくりと動き出す先輩。

まず右手に何かを握るように力を込め、渾身の勢いで振り下ろす。俺の頭上に通常ではありえない角度から瀑布を叩きつけられたかのような衝撃が走り、そのまま意識を失った。

最後に聞こえてきたのは、先輩の万感を込めた叫びだった。

「てつめえ脳髓がち割りたいのかボケエエエエエエー!!」

……………先輩、キヤラ、違いますか？

三話目、目の前を通り過ぎていく理解不能の中で。

「殺し……、ホン……内臓……」

「私は、そんな……と……い、彼女を……とした」

「いやダメだね、内臓ブチ……脳髓……骨という骨を……千切る！」

「後輩にそんな食肉加工じみた処理を施そうとする彼女に戦慄を覚えつつ、私は椅子の方に……目を向けるとそこには意識を取り戻した少年がいた」

あまりの不穏な会話に薄ぼんやりと中空を彷徨っていた俺の意識が覚醒した。

どうやら俺は座っているなので、立ち上がろうとすると……ジャラツという音と共に引き戻された。

自分の体を見るとなんとパイプ椅子に鎖で縛り付けられている。幸い後頭部以外痛むところはなかったが、手は後ろに回されておりほぼ完全に身動きが取れない。

唯一活動的な首と目を動かしてあたりの様子を伺って見るとコンクリートで出来た窓のない部屋。

叫び声が何処にも届きそうにない造りが俺の運命を暗示していて嫌だった。

そして、部屋の中には俺をのぞいて二人の人物が、一人は……。

「おい、なに薄ら馬鹿な顔面してんだコラ。こっち向けやコーハイ」手に持った紙コップの中の液体を俺の頭皮に与えてくれた我らが鈴代先輩（の裏人格が一卵性双生児かドッペルゲンガー、大穴で同一人物）がそれこそ殺人鬼のような笑顔を向けてくれていた。当然合羽は脱いでおり、現在は黒一色のＴシャツにカーゴパンツと言っていたたちだった。そんなでも着るのが先輩だと凜とした印象が付随するからつくづく外面は財産だと思う。

液体は察するにカルピス。しかしだいたい濃いので中々俺の頭から

離れてくれない。

「彼女は身動きが取れない少年の顔に白くねばねばとしたものを垂らす。彼はその粘度のある臭いにむせ返りそうになった」

もう一人は何故かぼそぼそ地の文みたいなめんどくさい喋り方をする男。

40歳前後だろうか、所々に白髪が混じっている。

いかにもユニクロな服装でパイプ椅子に座って裂きイカを齧っていた。絶対独身だ。

「おい読坂よみさかてめえわざと猥褻な表現用いてんじゃねえよ。割るぞ」

「予定調和、彼女の突っ込みは今日も冴え渡る。私はあえて彼女の暴言をスルーした」

「スルーするって出来てねえだろうがよ！　つか人と話すときは目エ見て話せ！」

「あのちよつとスイマセン。人を鎖で雁字搦めにした意味を教えてくださいませんか？」

とりあえず喧々諤々と不毛に見える会話に割り込んだ。

先輩が寿命が縮むような眼でこちらを睨んできたのですぐに止めておけば良かったと後悔した。

「ああ！？　そんなもんお前が人ぶん殴って仕事の邪魔したからに決まってるだろうがよ。全く普段なら記憶飛ばしてサヨナラなんだがよ。ったくお前って奴はつくづく面倒かけやがって。オラ、一発殴らせ、ろ！」

殴らせ、の段階であごに衝撃、先輩が思いっきり拳を振りぬく。

だが、その痛みよりその行動力より何より驚いたのは。

先輩の拳が振りぬいたのが空気だったにもかかわらず、俺のあごに衝撃が走ったって事だ。

「あの、あれ、え？」

「私はあまりに安易に自分の能力をひけらかす彼女に向かって黙って肩をすくめる。いくらインシキシャ同士だからと言ってそれはないだろう。それに彼女にとってはその恨みの対象かも知れない

が、我々としては彼は重要人物の一人。丁重に扱ってもらいたかった。が、頭に血が上った彼女に何を言っても無駄。天井を仰ぎつつ、私は口を閉ざしていた」

委任指揮者？ 俺の脳裏に積まれた大金の隣でタクトを振るタキシード姿の男が目には浮かんだ。

目の前を理解できない情報が通り過ぎていく、自分が乗るはずだった電車を見送りながら駅のホームに立ち尽くしているような気分になった。

「微塵も黙れてねえよ。つかこいつが断ったら記憶消すんだから問題ないだろ。お前は命がかかってないから気楽だろうがこっちは真剣なんだよ！ とつとと本題に入ろうぜ！」

「一理ある。私はそう判断して彼女の方を振り向き、言った『それじゃあ、遠井君……だったかな君に一つ提案がある』提案と言うより脅迫に近い事を今から行う自分にやや罪悪感を覚えた」

声高っ！ 裏声を使ってまで地の文と言う設定に執着しているらしい。

『と、いうよりまずは現在君のおかれた状況について説明しておこうか』

「よし、説明なら俺からする。つかこいつに説教がしたい」

俺と言うボーイッシュな一人称に新たな萌えを感じていた俺の意識が物理的に先輩の方へ向く。

詳しく言えばまた『衝撃』を頭に喰らった。身じろぎ出来ないために全てのダメージが首にいつてかなりつらい。

「よし、今からお前がどんな状況に置かれているか教えてやろう。

今お前は加速的に進んでいく状況に追いつけないでいる。だから私に何の罪悪感も抱いていないし、自分がどんな立場にいるのかも分かっている。端的に言おう。お前、このままだと死ぬぞ。二日後、それも私と心中だ」

今までで一番分かりやすい説明だった。

先輩の引き攣るような笑顔がその説明に真実味を付加させて。

多分、俺も同じような表情をしていたと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7126t/>

マイノリティなリアリティ

2011年6月2日17時55分発行